

肝がん患者である母の療養生活を支える娘の体験に関する研究

奥田美香* 名越恵美** 寺下由華*** 坂元直夏****

要旨：本研究の目的は、肝がん患者の母の療養生活を支える娘に焦点化し、娘の体験を明らかにすることである。

研究参加の同意が得られた肝がんの告知をされた母の生活に影響のある支援をしている娘7名に、半構造化面接を行い、得たデータを質的機能的に分析した。その結果、母の療養生活を支える娘の体験は、【療養生活の維持に向けての働きかけ】、【日常生活を妨げない距離の保持】、【母を気遣う】、【母の意思決定を尊重】、【治療継続を要望】、【周囲の協力による安心感】、【将来に懸念を抱く】、【当事者意識を持つ】、【自分の生活を優先】の9つのカテゴリーで構成され、「母へ向かう視点」と「自分へ向かう視点」の2つの体験があった。娘の体験は、娘の心身のコントロールを担っていることが明らかになり、先を見据えた情報提供をし、母の病期進行時、メンタルヘルスを崩す可能性のある娘の精神的フォローを行う必要があることが示唆された。

キーワード：肝がん患者の母 療養生活を支える 娘の体験

I. はじめに

全世界で2022年には、がんの罹患は2000万人であり、死亡は970万人であった(Freddie, B et al., 2024)。近年は、化学療法・放射線治療や早期発見技術の進歩が貢献しており生存率は徐々に改善している。しかし、肝がんの生存率は、全体と比べて低い。1990年以前、輸血や血液製剤の使用や消毒不十分な注射器、針などの医療行為による感染例をはじめとしたウイルス性肝炎が多く存在した。直接作動性ウイルス薬の登場でHCV排除率は向上し、C型慢性肝炎、肝硬変を背景とした肝がんは減少し、原因不明例や非B・Cウイルス性肝炎、非アルコール性脂肪肝炎が増加することが予想されている。また、今まで男性に多かった肝がんであるが、非ウイルス性の疾患が増えたことで女性の肝がんが増えている。

肝がん患者の多くは、肝がんの前段階として、肝炎を罹患しており、肝炎治療を長期に受けたのち肝がんを告知される。家族は、その長期的な闘病生活に寄り添うことになる。肝がんの療養継続には、セルフケアへの支援や心理的サポートなども重要と指

摘されており(林, 2011)、家族に対しても支援が必要である。家族を支えることは、結果として患者が安心して闘病生活を続けていくことにつながる。

親が病気になると、家族の介護は、一般的に妻や嫁、娘がその役割を担ってきた。女性が結婚すると、実家を去り、嫁ぎ先の一員となるため、実の親の介護より、嫁ぎ先の親の世話をすることが多く、娘が実親の介護者としての役割期待は低かった(上山, 2016)。近年では、女性が結婚すると、嫁ぎ先での役割とともに、実家でも親の介護者の役割が追加され、複数の役割が存在する(上山, 2016)。娘は、母親との距離の近さを保ちながら自立する(水本, 2011)と言われており、現代に特徴的で、近年の家族形態に影響していることが推察される。

肝がん患者の家族の研究の内容を概観すると、がんに対して夫婦で共闘していく姿勢(大久保, 2015; 千葉, 2014)と、病状の進行に伴って出現する不安に対して、他者のサポートを借りながら患者自身の情緒の安定をはかる姿勢が明らかになっていった(大久保, 2015)。そして、家族は、病状の悪化や

* 山陽学園大学看護学部看護学科

** 岡山県立大学保健福祉学部看護学科

*** 元津山市役所

**** 倉敷中央病院

〒703-8501 岡山県岡山市中区平井1-14-1

〒719-1197 岡山県総社市窪木111

〒708-8501 岡山県津山市山北800

〒701-8602 岡山県倉敷市美和1-1-1

死の覚悟に対する複雑で曖昧な思いをその時々で、浮いたり沈んだり繰り返し、心が揺れ動く中で患者を支えようとしていた（千葉，2013；西口，2013）。

以上のことから、患者は揺らぎつつも家族の一員として存在意義を感じ、家族へ精神的に支えてもらいたいと望んでおり、家族は揺らぎながらも患者の療養生活を支える存在でありたいことが明らかになっている。しかし、これらの研究結果は、対象の患者の性別を限定しておらず、女性に焦点化している研究は見られなかった。近年、肝がんの罹患者は減少傾向にあるものの、非アルコール性脂肪性肝疾患（nonalcoholic fatty liver disease：NAFLD）は増加傾向にあり、中でも女性の肝がん患者の増加が目立つ（肝がん白書，2022）。そして、近年の家族形態変化により、家族の中でも、娘が母を支えるパターンも増えている（上山，2015）。そのため、肝がん患者を母に絞り、支援する対象を娘に焦点化し研究することが必要である。

以上のことから本研究では、肝がん患者の母の療養生活を支える娘の体験を明らかにすることを目的とする。本研究により、肝がん患者の母の療養生活を支える娘の体験が明らかになり、母の療養生活における娘への支援の示唆を得ることができる。

Ⅱ. 用語の定義

1. 療養生活

肝がん告知後、肝動脈塞栓術・ラジオ波焼灼術を2回以上経験し、在宅での生活を継続していること。

2. 体験

自分自身や周りの状況に対する娘の受け止めとそれに対する認識・感情を含めた思いや行動のこと（池田，2010）。

Ⅲ. 方法

1. 研究デザイン

質的帰納的研究デザイン：質的研究とは、「研究者と研究参加者が相互作用をする中で行われ、言葉などの質的データを用いて、研究参加者にとっての経験やその意味を機能的に探求する研究である」（グレッグ，2016）と定義されており、研究参加者の「言葉」や「文脈」を介して、その現象の本質的な意味を解釈する手法である。本研究は、肝がん患者の母の療養生活を支える娘の体験を研究参加者の視点から見た思いや考えなどに着目している。これらは、

「言葉」を介して表出されるものであり、その複雑な現象を明らかにするため採択した。

2. 研究参加者

本研究では、同居・別居に関わらず、肝がんを告知された母の生活に影響のある支援をしている20歳以上の娘を対象とした。なお、肝がんの告知後すぐに治療が始まるため、初回治療の患者の娘は、除外とした。これは、がん告知後、在宅での生活の経験がないことと、家族ががん告知で「がん＝死」のイメージを持つため、がんという言葉に影響を受ける可能性がある。病名の適応には、時間を要することが予想されるため、除外した。

3. データ収集方法

研究の同意が得られた参加者に対して、インタビューガイドを用いた半構造化面接法を用いデータを収集した。面接時間は、自由に語ってもらうため時間制限は設けずに1回とした。面接は、告知時から現在の思い、疾患に対する知識、療養生活について困ったことや不安などについての質問で構成したインタビューガイドを用いて実施した。面接の実施日時は、参加者の都合に合わせた。面接はプライバシーが保たれる個室で行い、面接内容は参加者の承諾を得た上で、ICレコーダーにて録音した。

4. データ分析方法

面接内容を録音したものを、逐語録におこし、生データとした。Krippendorffの内容分析の手法（Krippendorff，1989；三上，1997）を用い、個別分析と全体分析の2段階の手順で分析を行った。Krippendorffの内容分析の手法は、データをもとにそれが組み込まれた文脈に関して再現可能でかつ妥当な推論を行うための一つの調査技法であり、文脈で何が語られているのかを明らかにする方法として、客観的に意味内容を捉えられると考え、本研究の分析方法に用いることとした。

まず、個別分析を行なった。①逐語録を熟読し、肝がん患者の母の療養生活を支える娘の体験に関する記述の部分を、参加者の言葉のまま抽出した。②①で抽出した記述の部分の意味を損なわず、内容が明確になるように書き表し、整理した文とした。③できるだけ参加者の言葉で簡潔に表現し、1次コードとした。④1次コードの文脈における参加者の本質的な意味を表す表現を2次コードとした。次に全体分析を行なった。①個別分析により得られた全参加者のすべての2次コードを集めた。②集めた2次

コードの相互の類似性と相違性に従い集約し、その意味内容を表すように表現しサブカテゴリーとした。③サブカテゴリーから、さらに意味内容の類似したものをまとめ、抽象度を高め、共通する意味を表すよう表現しカテゴリーとした。④各カテゴリー間の関係性を構造化した。

そして、分析の信頼性と妥当性を確保するために、定期的に質的研究を専門とする複数のメンバーで分析を行なった。

5. 倫理的配慮

研究参加者に、研究の趣旨、研究の任意性、中断の自由、不利益の回避、プライバシーの保護、個人情報取り扱い(匿名性、データの管理と廃棄)、研究に限ったデータの使用、研究結果の公表について書面を用いて説明し、署名により研究参加への同意を得た。なお、本研究は、岡山県立大学倫理委員会の承認(承認番号17-10)と対象施設の倫理委員会の承認(承認番号343)を得て実施した。なお、本研究における利益相反は存在しない。

IV. 結果

1. 研究参加者の概要

参加者は7名で、平均年齢は47.7歳(40～57歳)であった。母と同居3名、別居4名であった。娘の仕事の有無に関しては、6名が仕事を持っており、1名が無職であった。また、患者である母は平均年齢75.4歳(68～82歳)で、平均闘病期間は、6年(3～9年)であった。

2. 母の療養生活を支える娘の体験の構成要素

母の療養生活を支える娘の体験は、【療養生活の維持に向けての働きかけ】、【日常生活を妨げない距離の保持】、【母を気遣う】、【母の意思決定を尊重】、【治療継続を要望】、【周囲の協力による安心感】、【将来に懸念を抱く】、【当事者意識を持つ】、【自分の生活を優先】の9カテゴリーが抽出された(表1)。

以下、各カテゴリーに沿って説明する。なお、【】はカテゴリーを示し、《》はサブカテゴリー、〈 〉はコードを表す。

1) 【療養生活の維持に向けての働きかけ】

【療養生活の維持に向けての働きかけ】は、《役割を維持できるように関わる》、《生活の一部を助ける》、《理解を確認するため、受診に付き添う》、《母の生活に口を出す》、《病気に必要な情報を集める》の5サブカテゴリーから構成された。本カテゴリー

は、母の療養生活や母親としての役割を維持できるように直接的に手を出すことを意味する。

2) 【日常生活を妨げない距離の保持】

【日常生活を妨げない距離の保持】は、《母の生活を見守る》、《食事管理は母に任せている》、《何もせず、成り行きを見る》、《距離を置く》、《母の性格を理解している》、《母を認める》の6サブカテゴリーで構成されていた。本カテゴリーは、母の心情や状況を考慮した距離を保持して、直接手を出すことなく、日々の暮らしぶりの把握を行うことを意味する。

3) 【母を気遣う】

【母を気遣う】は、《体調を気にかける》、《母の気持ちを思いやる》、《加齢に伴う治療の影響を心配する》の3サブカテゴリーで構成されていた。本カテゴリーは、母の生活や気持ちを尊重し、体調を気にかけ、心を寄せることを意味する。

4) 【母の意思決定を尊重】

【母の意思決定を尊重】は、《母の望む治療を受けるよう調整する》、《母の気持ちを気にする》、《治療決定は任せる》の3サブカテゴリーで構成されていた。本カテゴリーは、母が治療や今後について決めたことを大切にすることを意味する。

5) 【治療継続を要望】

【治療継続を要望】は、《医療者に期待している》、《治療に期待している》、《他の肝がん患者のことを気にする》の3サブカテゴリーで構成されていた。本カテゴリーは、今後の治療や医療者の支援に期待し、治療継続を願い求めることを意味する。

6) 【周囲の協力による安心感】

【周囲の協力による安心感】は、《家族の協力がある》、《今後について家族と話す》、《母の近所との良好な関係を保つ》の3サブカテゴリーで構成されていた。本カテゴリーは、周囲の協力で自分一人ではないことを実感し、母に対する責任が軽くなり心が安らぐことを意味する。

7) 【将来に懸念を抱く】

【将来に懸念を抱く】は、《病気の進行は認識している》、《再発の不安が持つ》、《今後を予測する》、《金銭面の不安を持つ》、《病院が遠方で医師の診療が続くられるか不安を持つ》、《今後の母の世話について不安を持つ》、《対応がすぐできない時を心配する》の7サブカテゴリーで構成されていた。本カテゴリーは、母の病気や世話の見通しについて、判断がつかず迷うことを意味する。

表1. 母の治療生活を支える娘の体験 カテゴリー一覧（抜粋）

カテゴリ (9)	サブカテゴリ (36)	コード (177 抜粋)
療養生活の維持に 向けての働きかけ	役割を維持できるように関わる	目標を与えて、治療を乗り切ってもらっている
	生活の一部を助ける	運転できない母のために病院へ一緒に行く
	理解を確認するため受診に付き添う	母が医師の説明を理解できないので必ず立ち会う
	母の生活に口を出す	母の生活について注意を促すことはある/食事についてアドバイスする
	病気に必要な情報を集める	インターネットで病気を調べる/糖尿病認定師に食事について相談する
日常生活を 妨げない 距離を保持	母の生活を見守る	治療後しんどそうなを見守る/母は世話をしなくても自立している
	食事管理は母に任せる	母の嫌いな食べ物を強要しない/母が食事に気をつけている
	何もせず成り行きを見守る	言っても従わないので言わない/飲酒していても目をつむる
	距離を置く	意見が衝突しないよう距離を置く/一緒に住まないくらいがちょうど良い
	母の性格を理解している	母は辛抱強い/母のことは自分が分かっている
	母を認める	母が食事を我慢していることは認めている
母を気遣う	体調を気にかける	持病について心配する/安静に出来ない母を心配する
	母の気持ちを思いやる	悪いことはわざわざ伝えない/病気について話をしない
	加齢に伴う治療の影響を心配する	歳をとってきて転倒しないか心配/歳をとり治療がしんどそう
母の意思決定を 尊重	母の望む治療を受けるよう調整する	母に安心して最後まで治療を受けさせてあげたい
	母の気持ちを気にする	肝がん罹患の思いを知りたい/病状悪化した時どうしたいか知らない
	治療決定は任せる	受診を勧めるが受信するかは母が決めるため意見を尊重する
治療継続を要望	医療者に期待している	母のことを知っている看護師の存在は心強い
	治療に期待している	治療できるうちは死なないと思える
	他の肝がん患者のことを気にする	遠方から受診している人たちの状況を知りたい
周囲の協力による 安心感	家族の協力がある	家族で分担して母の送迎をしている/家のことは夫が協力してくれる
	今後について家族と話す	今後母が身の回りのことをできなくなれば、きょうだいで相談する
	母の近所との良好な関係を保つ	母の近所がよくしてくれる
将来に懸念を抱く	病気の進行は認識している	肝硬変から肝がんへ移行するのは時間の問題だと思っていた
	再発の不安を持つ	必ず再発はあると思っている/治療ができなくなることは想定している
	今後を予測する	母が死ぬことに危機感がある/母が亡くなったら自分一人きりになる
	金銭面の不安を持つ	自分の生活があり母に金銭面で援助できない
	病院が遠方で医師の診療が続けられるか不安を持つ	緊急時遠方の病院までことを考えると対応が大変
	今後の母の世話について不安を持つ	今後どんな風に世話ができるか分からない
	対応がすぐできない時の心配をする	家族の時間もあり、すぐに対応できないことが不安
当事者意識を持つ	自分の判断で対応する	母へ検査値を補足説明し注意を促している
	自分が頼られていることを自覚する	母は私を頼りにしている/治療の時に娘の私にそばにいてほしい
	家族に期待を持たない	母のことは夫に相談しない/父のサポートに期待していない
自分の生活を優先	自分の時間を優先させる	自分の時間を優先させながら母に関わる
	無理せずサポートする	自分ができることは母にしてあげたい/面倒をみるが無理しない

8) 【当事者意識を持つ】

【当事者意識を持つ】は、《自分の判断で対応する》、《自分が頼られていることを自覚する》、《家族に期待していない》の3サブカテゴリーで構成されていた。本カテゴリーは、自分が頼られていることを自覚し、実母に対して責任や義務を感じて、一人で判断し、時期を見極め行動することを意味する。

9) 【自分の生活を優先】

【自分の生活を優先】は、《自分の時間を優先させる》、《無理せずサポートする》の2サブカテゴリーで構成されていた。本カテゴリーは、自分の生活パターンを崩すことなく、無理せず、母と関わることを意味する。

3. カテゴリー間の関係性から見た母の療養生活を支える娘の体験の構造

【療養生活の維持に向けての働きかけ】、【日常生活を妨げない距離の保持】、【母を気遣う】、【母の意思決定を尊重】、【治療継続を要望】、【周囲の協力による安心感】、【将来に懸念を抱く】、【当事者意識を持つ】、【自分の生活を優先】の各カテゴリー間の関係性を検討した。肝がん患者の母の療養生活を支える娘の体験の全体像を図1に示す。娘の体験として「母へ向かう視点」と「自分へ向かう視点」の2つが導き出された。以下、各過程に沿って説明する。

娘は、母の病状や世話に関して、【当事者意識を持つ】と自覚しており、【母を気遣う】という根底にある思いを持っていた。【母を気遣う】は母の生活の支援と母の病気に対しての思いという体験に分岐していた。

母の生活の支援は、積極的に支援を行う【療養生活の維持に向けての働きかけ】と見守りとしての【日常生活を妨げない距離の保持】を行っていた。また、他家族員からの【周囲の協力による安心感】は、母の生活を支援をする娘の安心感を保つために、母の生活を支援に向かっていた。母が自立した生活を送れるということは、母が、自分のことを自分で決められることであり、治療について、決定権を母が持ち、娘はその決定を支持するという、【母の意思決定を尊重】するという支援をしていた。

母の病気に対しての思いは、【母を気遣う】を根底に持ち、母の病気が完治することを願う【治療継続を要望】といつか治療ができなくなるのではないかと、最期の時を予見し【将来に懸念を抱く】という、相反する思いに続いていた。

「自分へ向かう視点」は、【自分の生活を優先】した上で、【当事者意識を持つ】ため、相反する気持ちを持ちながら、母の生活の支援を行っていた。

V. 考察

1. ソーシャルサポートと相手の娘の立ち位置

肝がん患者の母の療養生活を支える娘の体験は、「母へ向かう視点」と「自分に向かう視点」の2つの様相が明らかになった。

図1に示すように、【当事者意識を持つ】は、【母を気遣う】へと向かっていた。これは、娘の母に対する役割意識・責任感・使命感が影響していると考えられる。娘介護者は、介護役割の自覚である使命感を認識している(梅野他, 2015)ように、娘は、病期進行に伴う母の援助を予想することで、役割意識の自覚が促進されていると考える。

【母を気遣う】は、母を支援するための行動のきっかけである。また、行動を継続するためには、母との関係が影響する。母と娘の関係が良好であれば、母に愛情を持って接し、母の支援を継続できると考える。被介護者の関係性の中で育まれる愛情は、介護継続を支える感情・情緒として重要(梅野他, 2015)であり、愛情は、支援継続の原動力と考えられる。したがって、【母を気遣う】は、娘の情緒的サポートと考えることができる。情緒的サポートとは、共感、安心、愛着、尊敬の提供が含まれている(田村他, 2013)と言われている。適切な情緒的サポートは、がん患者の心理適応を促す(神谷, 2015)ことから、娘の情緒的サポートを行うことで、母を心理的に支えていると考える。

また、母への直接的な行動として、【療養生活の維持に向けての働きかけ】と【日常生活を妨げずに距離を保持】が行われていた。この行動には、相反する性質があり、母の生活に積極的に介入する行動と見守る行動があった。【療養生活の維持に向けての働きかけ】は、病気や加齢による影響で母ができない部分の援助を行うことである。これは、《生活の一部を助ける》に示されるように受診の送迎や食事の世話などの生活の介助や、《病気に必要な情報を集める》に示されるように、母の代わりに生活のサポートや情報を集めて母へ説明することは、母の手足の代わりになる道具的サポートとしての援助と考える。道具的サポートとは、形のある物、日常生活でのサービスや仕事による援助すること(田村

他, 2013) である。本研究参加者は、仕事の有無や同居の有無に限らず、援助を行っていた。また、家族が身近にいて、家事の手伝いなど家族の道具的サポートを得ながら生活している者の意思決定は促進される(志和他, 2019) ことから、身近な娘の存在は、母の意思決定にも影響すると考える。そして、《病気に必要な情報を集める》、《母の生活に口を出す》に示されるように、母のために情報を集め、母へアドバイスしていることは、母への情動的サポートと捉えることができる。情動的サポートとは、問題解決の手助けと助言、情報を提供すること(田村, 2013) である。情動的サポートは、通常、医師や看護師などの医療者から受けることが多く、本研究参加者の母は、高齢なため情報を正確に受けとっていない可能性がある。そのため、娘が積極的に肝がんについて調べ、医療者から情報を集め、母に伝えることで、母の意思決定を援助していると考えられる。

また、積極的行動とは反対に【日常生活を妨げない距離の保持】は、《母の生活を見守る》、《何もせず成り行きを見守る》に示されるように、母の生活を見守る行動であった。母の自立を援助することは、積極的な介入だけではないと考える。娘は、母が判断して行う行動を、病状に影響しない範囲で判断し、《何もせず成り行きを見守る》に示されるように静観していた。また、《距離を置く》に示されるように、

母の性格を知る娘だからこそ、衝突しないように距離をとり、母との関係を保っていた。衝突しないよう距離を置くことは、意見の相違から生じる不快な思いをお互いに避けていることであると考えられる。今後、母の病期の進行で、母への介入は増える可能性が高く、衝突を繰り返せば、お互い気まずくなり、回避するようになる。そうならないために、母との距離を置き、母の判断や行動を支えていると推察できる。以上の行動は、評価的サポートと考える。評価的サポートとは、自己評価に関連するフィードバックすること(田村他, 2013) である。娘は、母の生活の支援と母の病気に対しての思いにおいて、相反する体験をしているが、母の生活の評価することを行っており、時には積極的に時には見守ることで母との関わりにおいて近づきすぎず、離れすぎず、バランスをとっていたと考える。

娘の行動に影響を与える外的要因として、【周囲の協力による安心感】と【自分の生活を優先】が見られた。【周囲の協力による安心感】は、緩衝効果と考えられ、母の療養生活を支える上で、娘の精神的な支えになっていると考える。このことは、夫が協力的である場合に介護者の負担感が減少する(鈴木, 2004) のように、協力者の存在により安心感を得ていたと考えられる。

そして、【母を気遣う】は、【治療継続を要望】と

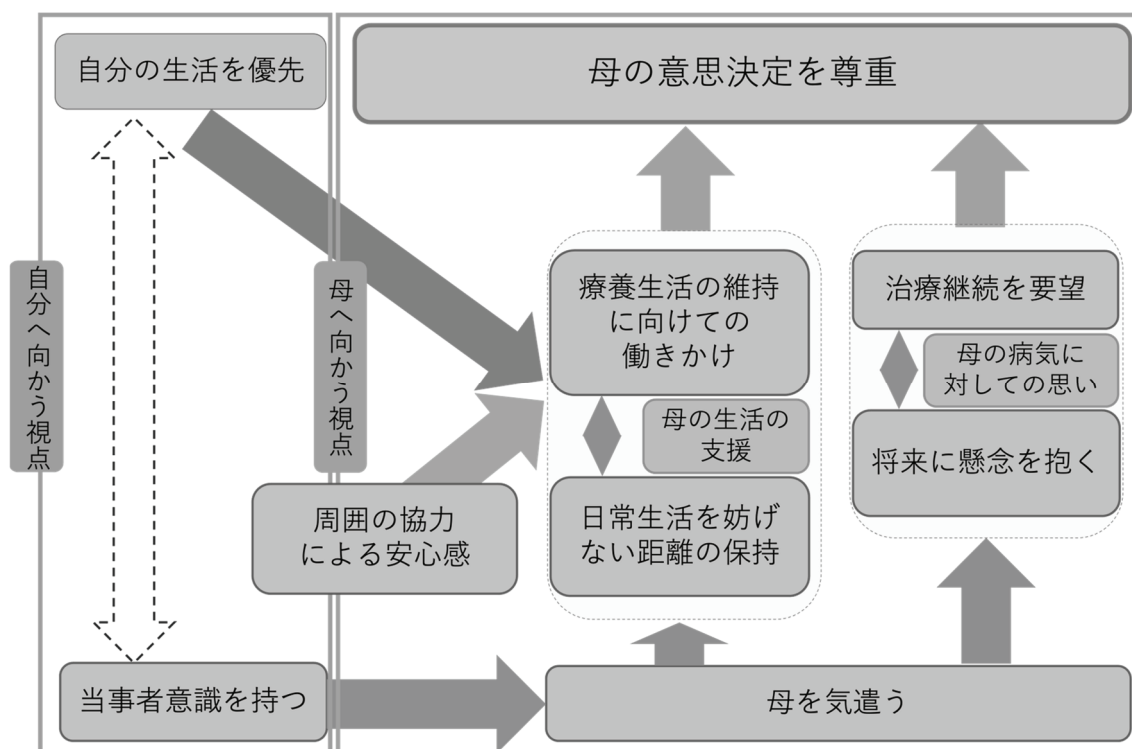


図1. 母の療養生活を支える娘の体験の全体像

【将来に懸念を抱く】へ向かっていた。これは、母の病気や今後の生活に対しての心配である。【治療継続を要望】は、治療が継続できることで、生き永らえることを望み、反対に【将来に懸念を抱く】は、治療ができなくなり、病期が進行し死を意識することによる今後の母と自分の生活を予測し、悩むことである。この予測は、将来、自らが行うであろう支援の予見であり、予期されたサポートと考えられる。予期されたサポートとは、将来必要となった場合利用可能であると認識されているサポートである（田村他, 2013）。通常、医療者から家族に向けてのサポートを示すが、娘から母のサポートとしても考えることができる。その理由として、内科治療のできる肝がん患者の入院期間は短く、看護師が家族と将来的な話をする機会はほとんどないため、医療者の介入は少ない。これは、〈今後母が身の回りのことをできなくなれば、きょうだいで相談する〉ように、娘を含む家族間で将来のことを相談し、予測を立てているからであると考ええる。娘は、相反する気持ちを持ちながらも関係性がすでに構築されている母に対し、割り切ってソーシャルサポートを行っていた。ソーシャルサポートとは、「社会的関係の中でやり取りされる支援のことで、健康行動の維持やストレスの影響を緩和する働きがある」（厚生労働省, 2024）。とされている。そして、実際に援助行動をするかしないに関わらず、いざという時には助けてくれる人がいるという安心感や実感を与えられる（太田, 2005）ことから、母は、娘に身体的・心理的に支えられていると言える。

2. 母の意思決定支援について

娘の思いや行動は、最終的に【母の意思決定の尊重】へ繋がっていた。治療の最終決定は患者本人である母が決断するが、実際には、母は娘を含む家族に治療内容を相談し、お互いが合意した上で、治療決定を行っていた。意思決定は、高齢になるほど医療行為を自分で決定することに対して消極的になる（大木, 2006）ことから、自分の余命を左右する治療の選択の局面で、高齢である母が1人で、がんの治療について決めることは困難であると考ええる。母に決断をしてもらうためには、娘が持っている情報を母に提供することが必要である。また、娘の情報提供により、母に理解できるように働きかけることで、母は、最善な治療を決定することができると考える。

娘を含む家族は、治療やケア、今後の生活の場所や援助などに直接関わる当事者である。家族が当事者である限り意思決定プロセスに参加することが必要（清水, 2015）であり、当事者である以上、母の意思決定に、関与すべきであると考ええる。厚生省のガイドラインには、「本人の意思決定」が基本となっているが、その意思決定には、関係者の合意を目指す（厚生労働省, 2024）としている。看護師は、意思決定を行うために必要としている情報を患者・家族へ提供し、理解できるように働きかけ、【母の意思決定の尊重】できる環境を提供することが必要であると考ええる。一方娘は、自身がサポートの提供者と自覚をしていなかった。しかし、娘が行う母への支援は大きな役割を果たしていることが明らかとなった。先の見えない不確かな状況の中で娘は、不安感や負担感の苦悩を感じており、不安感や負担感を軽減するためにも、娘へのサポートが必要であると考ええる。看護師は、母に娘が行っている支援を理解した上で必要な援助をしていく必要があると考ええる。

看護師は、母に娘が行っている支援を理解した上で、今後の見通しを持てるような関わりを行い、先を見据えた情報を提供する必要がある。また、治療期から次の段階に病期が進んだ時、メンタルヘルスを崩す可能性があるため、娘の精神的フォローを行う必要があると示唆された。

本研究の限界としては、1施設の女性の肝がん患者の娘7名を対象としたため、施設の特徴が反映されている可能性があること、対象者数が少なく、入院中、家族の面会が多い家族関係良好な集団であり、結果、母を気遣う集団であったためデータに偏りがある可能性がある。今後、対象者の数を増やし、複数の施設にフィールドを広げることが課題となる。また、身近に相談できる家族がいない患者などの複雑な家族関係への支援についての研究が必要と考ええる。

VI. 結論

母の療養生活を支える娘の体験として、【療養生活の維持に向けての働きかけ】、【日常生活を妨げない距離の保持】、【母を気遣う】、【母の意思決定を尊重】、【治療継続を要望】、【周囲の協力による安心感】、【将来に懸念を抱く】、【当事者意識を持つ】、【自分の生活を優先】の9つの概念が明らかとなった。さ

らに娘の体験には、「母へ向かう視点」と「自分に向かう視点」の2つの体験があった。娘の体験は、葛藤を乗り越えて関係を構築していた。そして、「母へ向かう視点」は、割り切った関係を持ったソーシャルサポートであり、「自分へ向かう視点」と評価的サポートは、娘の心身の安寧に向けたコントロールを担っていた。

付記

本研究を実施するにあたり、快くインタビューにご協力してくださいました研究参加者の皆様に謹んで御礼申し上げます。また、研究にご尽力くださいました施設の病院長様、看護部長様および看護師の皆様は心より感謝いたします。

文献

- 千葉のり子, 長澤久美子, 小野知美(2014). 肝動脈塞栓術を受けている肝臓がん患者の夫に対する妻の支援. 日本看護学会論文集成人看護Ⅱ, 4: 55-58
- 千葉のり子, 小野知美(2013). C型肝炎由来の肝がん患者で肝動脈塞栓術を受けている患者の配偶者の思い. 家族看護学研究, 18(2): 109-117
- Freddie B, Mathieu L, Hyuna S, Jacques F, Rebecca L, Isabelle S, Ahmedin J (2024). Global cancer statistics 2022: GLOBOCAN estimates of incidence and mortality worldwide for 36 cancers in 185 countries. A Cancer Journal for Clinicians published by Wiley Periodicals LLC on behalf of American Cancer Society. 2024, 1-35.
- グレッグ美鈴(2016). 質的研究とはグレッグ美鈴他編 よくわかる質的研究の進め方・まとめ方看護研究のエキスパートをめざし第2版. 医学書院, 16-28.
- 林直子他編(2011). 成人看護学成人看護学概論. 南江堂.
- 池田牧他(2010). 肝臓がん患者の体験と看護師の支援. 日本がん看護会, 24(1): 61-68.
- 一般財団法人日本肝臓学会(2022). 肝がん白書令和4年度. 日本印刷株式会社.
- 厚生労働省(2024). e-ヘルスネット. 健康用語辞典 ソーシャルサポート, <https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/keywords/social-support> (2024.4.15アクセス).

- 厚生労働省(2024). 人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン, <https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10802000-Iseikyoku-Shidouka/0000197701.pdf> (2024.4.15アクセス).
- Krippendorff .K(1989)三上俊治訳(1997). メッセージ分析の技法「内容分析」への招待第1版. 勁草書房.
- 神谷潤子(2015). 化学療法を受けている再発がん患者の希望の維持に影響するソーシャル・サポート. 日赤看会誌, 15(1): 11-19.
- 水本深喜, 山根律子(2011). 青年期から成人期への移行期における母娘関係－「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の4種型モデル」の検討?. 教育心理学研究, 59(4): 462-473.
- 西口千博, 三木美恵, 山中久美, 山下典子, 小倉美和(2013). 肝臓がんで入退院を繰り返している患者家族の思い－患者を支えるキーパーソンに焦点をあてて－. 奈良県立三室病院看護雑誌, 29: 23-27.
- 大木桃代(2006). 日本人の医療行為に対する意思決定の測定. 人間科学研究科文教大学人間科学部, 27: 83-92.
- 大久保仁司(2015). がん患者の配偶者が患者の療養プロセスにおいて体験した困難への対処行動. Hospice and Care, 23(3): 373-377.
- 太田仁 (2005). たすけを求める心と行動: 援助要請の心理学. 金子書房, 13-18 109-119.
- 上山千恵子, 田場真理, 守本とも子(2015). 認知症高齢者を介護する娘介護者の体験?介護生活の中で体験する困難と、介護生活の支えとなるもの－. 奈良学園大学紀要, 2016: 67?79.
- 清水哲郎(2015). 本人・家族の意思決定を支える－治療方針選択から将来に向けての心積もりまで－. 医療と社会, 25(1): 35-48.
- 志和知華, 岡光京子(2019). 進行肺がん患者の退院支援における意思決定の影響要因. 日本看護倫理学会誌, 8 (1): 48-55.
- 鈴木征男(2004). 老親への援助行動と負担感. Life Design Report. 1-15.
- 梅野朱美, 藤野成美, 古野貴巨, 片桐都茂子(2015). 重度要介護者を介護する娘介護者における在宅介護継続を支える認識. 公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団.

http://www.zaitakuiryoyuumizaidan.com/data/file/data1_20170406090242.pdf.(2018.12.15アクセス).

田村真由美, 末次典恵, 助広重紀(2013). がん患者へのソーシャルサポートに関する文献的考察－外来で治療を受ける患者支援に向けて－. 南九州看護研究誌、11 (1) : 37-45.

Research on the Experience of a Daughter who Supports the Recuperation Life of Her Mother with a Liver Cancer Patient

MIKA OKUDA*, MEGUMI NAGOSHI **,
YUKA TERASHITA ***, NAOKA SAKAMOTO****

**Department of Nursing, Faculty of Nursing, Sanyo Gakuen University 1-14-1 Hirai, Naka-ku, Okayama 703-8501, Japan*

***Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University, 111 Kuboki, Soja, Okayama 719-1197, Japan*

****Tsuyama City Hall, 800 Yamakita, Tsuyama Okayama, 708-0004, Japan*

*****Kurashiki Central Hospital, 1-1-1 Miwa, Kurashiki, Okayama 710-8062, Japan*

Abstract : The purpose of this study is to focus on daughters who support the recuperation life of their mothers with liver cancer and to identify their experiences.

Seven daughters who were supporting their mothers who had been notified of liver cancer and whose lives were affected by their mothers' lives were identified as those who agreed to participate in the study, and data obtained through semi-structured interviews were analyzed qualitatively and functionally. The results showed that the daughters' experiences of supporting their mother in her recuperation consisted of nine categories: "Working to maintain her recuperation", "Maintaining a distance that does not interfere with her daily life", "Caring for her", "Respecting her decision-making", "Desiring to continue her treatment", "Feeling secure through cooperation with others", "Confused about the future", "Awareness of the parties involved", and "Putting her own life first". The categories consisted of two experiences: [Perspective toward mother] and [Perspective toward self]. The daughter's experiences revealed that she was in control of her physical and mental health, suggesting the need to provide information that looks ahead and to follow up mentally with her daughter, who may have mental health problems when her mother's illness progresses.

Keywords : Mother of liver cancer patient, Supporting in her recuperation, Daughter's experience